

# 宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法

## III. つる , 竹

内海泰弘<sup>1</sup>, 村田育恵<sup>2</sup>, 椎葉康喜<sup>3</sup>, 宮島裕子<sup>2</sup>, 井上晋<sup>1</sup>

<sup>1</sup>九州大学農学研究院, <sup>2</sup>九州大学生物資源環境科学府, <sup>3</sup>九州大学演習林

### 1. はじめに

宮崎県椎葉村大河内地区は山林が大部分を占める山岳地域であり,人々は森林に生育する様々な植物を利用して生活を営んでいる。しかし植物の伝統的な利用法を知る人の数は減り続けてきた。やがて消滅する危険性のある地域固有の植物方言とその伝統的な利用法に関する知識を保存しておく必要がある。そこで我々はこれまで大河内地区における高木および低木の民俗学的利用を記録してきた<sup>1)</sup>。本報告では,引き続き大河内地区に生育するつる植物,タケ類の伝統的な利用法とその方言について報告する。

### 2. 調査地の概要と調査方法

調査地の概要と調査方法は既往の報告<sup>1)</sup>に準じた。大河内地区で生を受け,幼少期から現在に至るまで当集落に居住されている年長者の中で,植物名とその利用法に詳しい73歳から79歳までの8名の方を対象者とした。2006年から2009年にかけて32種のつる植物と,8種のタケ類ならびにシュロの大河内地区での呼称とその利用法について各人に1から3回調査を行い,得られたデータは当地区出身の椎葉と,当地区にそれぞれ11年,6年,3年,2年居住ないし滞在した井上,内海,村田,宮島とで検討を加え,複数の人から確証が得られた樹種を選抜記述した。なお,呼称や用途で区別されずに用いられていたカラスウリとキカラスウリ,モミジカラスウリをカラスウリ類,ツヅラフジとアオツヅラフジをツヅラフジ類として記した。

### 3. 結果と考察

つる植物のなかでマツブサとサルナシ,ツヅラフジ類は結束用として重要な材料であった。マツブサは建築材を縛るのに最適とされ,茅葺き民家の屋根の軸組を縛る際に用いられた。水に濡らした状態では柔らかいが,乾燥すると硬くなるので,古民家を解体する際にマツブサのつるを切るのは容易ではなかった。集落近くに生育していないため,標高の高い演習林付近で採取することが多かった。サルナシはハシツリカズラと呼ばれ曲げにくいので細工物には向かないが,強度が大きいので吊り橋を架ける際の材料に用いられた。当地区では籠を編む場合はツヅラフジ類のつるを用いた。ツヅラフジ類のつるには他の植物などに巻きついて登攀するものと地面を匍匐してのびるものがあり,籠の材料になるのは地面を匍匐したつるの1年生の部位である。これを秋に収穫し腰に下げる籠などを編んだ(図1)。



図1 ツヅラフジ製の籠

用材としてはヤマフジのつるの通直な部分が玄翁の柄に用いられた。これはつるがよくしなり,手に衝撃が伝わりにくい性質を利用したものである。

つる植物の食材としての利用は多様である。アケビ類の実実は全国的に広く親しまれており,当地で食用されているアケビ属にはアケビ,ミツバアケビ,ムベの3種がある。人によりアケビが一番おいしいという人とミツバアケビがそうであるという人がいて意見が分かれた。サンカクヅルは当地区ではヤマブドウと呼ばれ実を食用とした。カラスウリ類の根からはデンブンプンが採取された。同所から7本以上幹が立っているものを目安とした大きな株の根を採取して食用としたが,直根であるため掘り取るのに労力を要し,美味ではなかった。クズの根からはカラスウリ類より味のよいデンブンプンが得られた。大きな根を叩い

たのちに搾り、水にさらして沈殿したデンプンを採取した。さらした際に浮かんできたドロと呼称する黒色の物質で団子を作ったりこれも食した。クズのデンプンは貴重品で風邪にかかった者の見舞いに持参した。ヤマノイモの担根体とムカゴは広く食用されてきた。ヤマノイモの担根体の収穫適期は冬だが、この時期に落葉性のヤマノイモのつるを探すのは困難である。そのため落葉前につるをたどって根の場所を確認しておき、目印に棒などを近傍にさして収穫に備えた。

そのほかのつる植物の利用として、サネカズラのつるを削って水に浸して得られる粘液を整髪剤とした。クズの根の絞りかすは着火して藁にくるんで腰に付けて煙を生じさせるカビと呼ばれる道具を作り蚊除けとした。また、サルトリイバラの葉は団子をのせる敷物として利用されている。

タケ類の中で器具材、建築材として最も用途の広いタケはハチクであった。茅葺き屋根の骨組みや簡易な屋根材、上水道の樋、物干し竿、盆に墓に供える花筒などに利用された。また割裂性良いことを利用して箆、篩、籬、畚など様々な竹細工の最良の材料とされた。マダケは稲かけ竿や物干し竿に利用された。山の管理を行う際、ほぼ閉鎖した常緑樹の林冠に生じたギャップで成長するマダケを残し通直な竹に仕立てた。目的にかなう材料を得るため、半施業的な取り扱いがなされていたことになる。マダケの皮は食品包装材として自家消費される他、昭和 30 年代までは換金林産物として積極的に収穫された。モウソウチクは節間が短く重量があるため田に水を引く樋に使われる程度であったが、皮は広くて短いことを利用して、雨傘、日傘兼用のバッチョウガサと呼ぶ傘を作り頭に被って用いた。このほかスズタケは椎葉村の伝統行事である的射に使う矢の材料とし、マダケは御幣を挟み山の神などを祭る際に用いた。

オカメザサとヤダケを除くタケ類の筍が食用にされた。特に重要な筍はハチクで大量に採取できたため乾燥品を換金林産物とした。筍が出るのはモウソウチク、ホテイチク、ハチク、マダケの順であり味の良さでは一般的にマダケ、ホテイチク、ハチク、モウソウチクの順である。スズタケも味の良い筍が得られるが量が少なく処理に手間がかかるためあまり用いられなかった。筍が現れる時期が種によって異なることを認識し、春から初夏にかけて種を変えながら筍を利用してきたことになる。

シユロは皮の繊維で水はけのよく軽い縄ができることから田植えの目印用の紐や背負い縄に用いた。また蓑の材料に皮をそのまま用いた。

タケ類には全種に方言名が存在したが、つる植物の中には方言が存在していない種が 32 種(類)中 10 種あった。これは低木類での傾向<sup>2)</sup>と同様に、生活上利用したり、危険を認識しなければならない植物には識別するための方言名があり、日々の生活に重要ではない種に名がつけられにくいためだと考えられる。タケ類は全種が何らかの形で利用されているが、つる植物の中で方言名のない植物のほとんどには伝統的な利用法が存在していない。一方つる植物の方言名にはハシツリカズラ(和名サルナシ)、ピンツケカズラ(和名サネカズラ)など利用法がそのまま名前になっているものもある。大河内地区の人々が認識する植物の世界は観察し分類する植物園、標本庫ではなく、生活のための資材・食料庫であったのであろう。

## 謝辞

調査にあたっては大河内地区在住の椎葉治美、松子夫妻、藤岡盛重、ミヤ子夫妻、椎葉司、君代夫妻、椎葉重行、久子夫妻、中竹和蔵氏に御教示、御示唆をいただいた。

## 引用文献

- 1) 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋(2007)宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 I. 高木.九州大学農学部演習林報告 88 : 45-56
- 2) 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋(2008)宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 II. 低木.九州大学農学部演習林報告 89 : 51-61